STAGNATE

生物学者 冨田秀一郎

BIOLOGIST

滞留

美術作家 木村亜津・前川紘士

ARTISTS

2024.8.24(Sat) —— 9.15(Sun)

［本展について］

「滞留」は、美術作家の木村亜津と前川紘士、生物学者の冨田秀一郎による自主企画展です。本企画のメンバーは、2021年から3年間、科学者と美術作家の交流を促す「ファンダメンタルズ プログラム」に参加した際に出会い、木村と冨田、前川と冨田のそれぞれがペアを組み、個別に交流を重ねてきました。交流のペースや内容はそれぞれで異なりますが、手探りでのやり取りの中から少しずつ他者と共有できる／してみたいと思う断片が生まれてきています。

展覧会タイトルの「滞留」とは、本企画を表す言葉として3者が共通して適っていると捉えた言葉です。英語に訳した“STAGNATE”には、“停滞”や“淀み”といったネガティブな印象を与える意味もありますが、元の流れから一旦は距離を取り、アイディアやイメージを漂わせることは、新たな想像や実践を育む機会にも繋がります。

本展では、それぞれの交流から生まれたものを来場者と共有すると共に、通常のスピードでは流れ過ぎて行ってしまうものを一時的に留める機会であるとともに、留まったもの同士が邂逅し、また新たな相互作用が生まれる事を期待しています。

［関連イベント］

~~イベント1・滞留トーク①~~ 終了しました。
~~2024年8月24日（土）15：00〜16：00~~
定員：15名（申込不要／先着順受付）
展示会場にて、木村、前川、冨田の3人が、企画や展示物についてお話します。

イベント2・滞留トーク②
9月15日（日）15：00〜16：00
定員：15名（申込不要／先着順受付）
出展者の3人が、展覧会や交流の経緯について振り返ります。

~~イベント3・虫の生活~~ 終了しました。
~~2024年8月25日（日）15：00〜16：00~~
冨田と木村が、虫の糞をお湯で抽出して味わうワークショップを行います。虫の糞にどんな味や、どんな色素が隠れているか、一緒に体験しましょう。

［関連書籍コーナー］

1階・大垣書店内に、木村、前川、冨田の3人の選書による書籍をあつめたコーナーを設置。制作にまつわるものだけでなく、それぞれの興味にもとづく書籍がピックアップされています。

| 展覧会 | 滞留　STAGNATE
| 会期 | 2024.8.24. 〜 9.15.　| 会場 | Gallery PARC
| 主催 | 滞留展プロジェクトチーム
| 協力 | Gallery PARC、ファンダメンタルズ プログラム
| 広報協力 | 一般社団法人HAPS
| チラシデザイン | 藤本敏行
| 助成 | 京都市「Arts Aid KYOTO」補助事業

［出展者情報］

ARTISTS

木村 亜津　Kimura Azu

私の世界を球とした場合、私は対象と向き合った時に円が重なる場所はどこだろう、重ならなくても触れる接点のような場所はどこだろうと考えます。対象を俯瞰で見たり、ぐっと距離を縮めるなどして観察を行い、また同時に、作品として形にすることで接点を探ってきました。今回の対象は昆虫であり、と同時に生物学者の冨田さんでもあり、どうすれば彼らと接することができるかを、実践的かつ具体的な方法で探ってみました。

1986年東京生まれ美術作家。ドローイング、立体、インスタレーションを中心に行う。武蔵野美術大学卒業後、植栽関連の仕事に従事していたが、働くうちに植物、生物そのものが気になるようになり、退職して作家活動を始める。興味は、植物、地層、昆虫など多岐に渡り、フィールドワークを通じた体験から発想を得て作品を発表している。

BIOLOGIST

冨田 秀一郎　Shuichiro Tomita

私たちが様々な生命現象と向き合ったときには、あらゆる階層で「擬人化」をして理解しようとすることに気づいた時に、私には「他の生物と意思疎通ができるのか（出来るとすればどうやって）」という根源的な問いが生まれました。しかしながら芸術家の皆さんとの交流を通じて感じたのは、人間同士でもその手段･方法は必ずしも保証されない、ということでした。開き直って全ての生物わけへだてなく「感覚共有幻想」として楽しむことにしました。

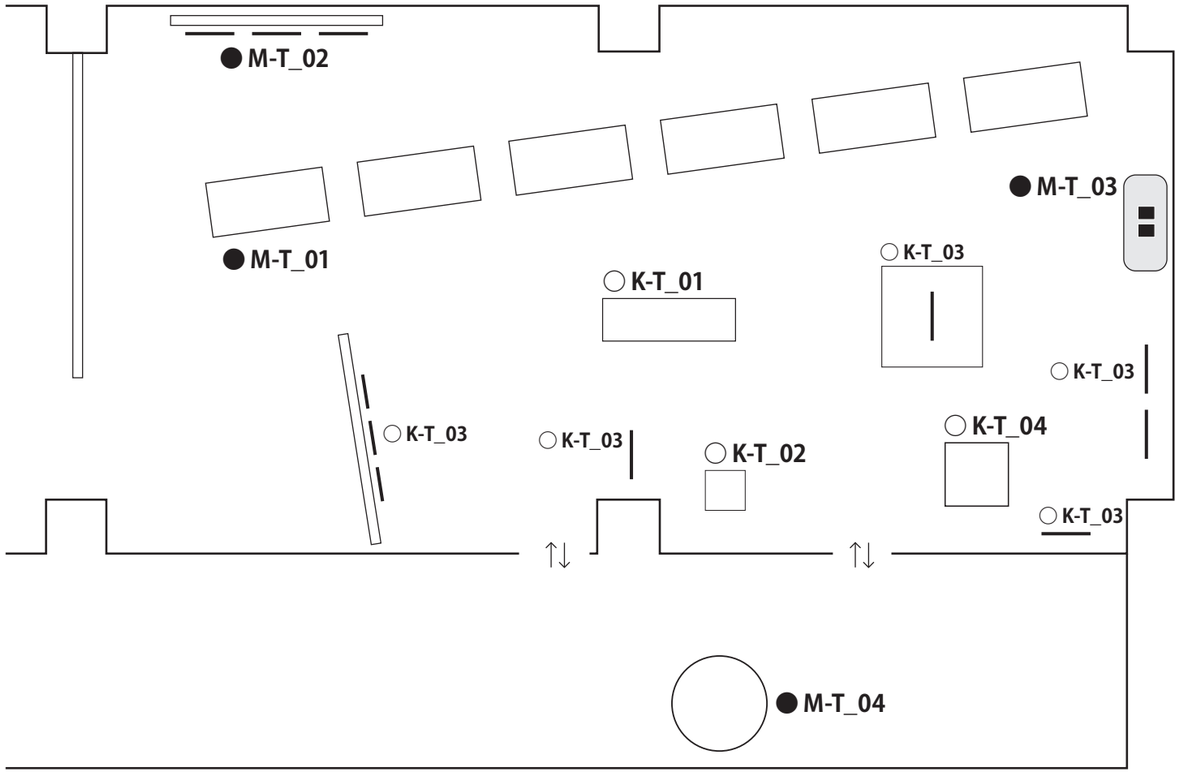
生物学者。1965年恋のチムニーの街こと北九州市で生まれました。超生意気な小学生は当時はまだ珍しかった中学受験をして中高一貫の進学校に入り、寮生活を通じてなんでも食べられる強靭な味覚を身に付けました。農家になりたい、などと言いだして工場勤めの父を困らせたのち、大学では農学部に進学しました。教員の先生方が皆優しそうという理由でカイコの研究室に入り、その後ずっとカイコと研究をしてきました。

ARTISTS

前川 紘士　Koji Maekawa

生物学者の冨田さんとの交流は、お互いの「捉え難さ」が、出発点であると同時に交流に取り組む際の動機でもありました。様々な方法を通して、お互いの興味が動くポイントを探す“炙り出し作業”を続けています。今回はこれまでの交流の中で、言葉を用いずに行った“もの”のやりとり「模型の交換」を並べます。また、身の回りの生き物についての記述の整理やアプローチをこの機に進め、今後の活動に還元出来る経験を増やしたい、と考えています。

1980年大阪生まれ。その都度の関心や状況を確かめながら、美術や表現のあり方や可能性を探る。近年は、科学者との長期交流や、触ることを前提とした作品制作とその運用、生活と重なる美術や表現のあり方の思索など、それぞれの実践を行き来しながら活動を続ける。主な展示・企画に、「前川紘士個展 多様体のドローイング カブリ数物連携宇宙研究機構アーティスト・イン・レジデンス報告展」大阪大学、大阪（2023）、「ユニバーサルミュージアム さわる！“触”の大博覧会」国立民族学博物館、大阪（2021）など。



● M-T=前川・冨田ペア

前川・冨田ペアはこの3年間、目的を設定せず互いの興味関心を自由に話す“放談”を軸に、様々な方法で交流を続けて来ました。
3年間の交流に関連した作品や資料をこの機に並べ、来場者と共有するとともに、あらためて捉え直し交流に還元する機会としたいと思っています。

● M-T_01（冨田 秀一郎、前川 紘士）

模型の交換Aの再制作

Reproduction of "Exchanges of models"
2023
＊作品にお手を触れないでください。

言葉を使わない”もの”を介したやりとり「模型の交換」は、一方が作った模型を相手に送り、送られた側がそれに手を加えて送り返す、という試み。
美術作家（前川）と生物学者（冨田）の双方が互いを念頭に制作・解釈し、それぞれ3回ずつ、計6回、送り合いました。加工の意図など言葉による情報の交換を一切せず、手を加えられたものだけが互いを行き来したこのやりとりの全貌を改めて見直すために、今展では大きさをオリジナルから1/2サイズに縮小して再制作したものを展示しています。

● M-T_02（前川 紘士）

触る線のドローイング_ボリューム4 / ケリュに触れる

Touchable line drawings_Volume 4 / Touching for Caylus
2021-2024　　プラタナス、オーク、柳
＊本作品は触っていただけます。

3年前の交流の最初期、前川が滞在していた南フランスの村ケリュにて手と紙で模っていた木の表面の凹凸を、帰国後、触る線のドローイングとして起こしたもの。

● M-T_03（前川 紘士）

いきもの日記
2021年7月3日-2024年6月30日

Diary of organisms　July 2021 - June 2024
2021-2024（交流の資料）
＊お手にとってご覧ください。撮影不可。

生物学の対象である「いきもの」について改めて捉えるために2021年からつけ始めた日記。当初は、冨田・前川が交流の1つの手段として、身のまわりのいきものについて閉じたSNS上に挙げていたもの。2年目からは前川が個人的に継続、この機会に3年分を一旦整理しました。

● M-T_04（前川 紘士）

誘虫灯と蚊帳の構造体

Insect trap and Structure for stagnation
2024
＊テラスに出て観賞いただけます。

走光性のある昆虫を誘導・捕獲するライト・トラップに使う誘虫灯と、蚊帳で出来た虫が出入り可能な構造体。別の場所での設置・使用も念頭に置いて制作していますが、今回は展覧会会期中のテラスでの使用を目標としています。
誘虫灯は展示期間中の指定時間（17時〜19時・雨天時は中止）に点灯されます。会場と地続きにある環境に潜む走光性のある虫たちをテラスに誘い込み、滞留する人間と虫たちが作品を通して出会う、あるいは出会えないことを確かめる媒体。
３年間の交流の中で繰り返し出てきた話題である「野生と飼育の間」や「身の回りの環境との距離」について実践的に考える一手段として制作・実施しています。

○ K-T=木村・冨田ペア

プロジェクト「虫の生活」

Life of insects

［冨田］
生き物っぽさとは何か？を一つのテーマに、木村さんとは交流を重ねました。その中で感じる側すなわち人間の受け止め方にも大きな多様性があることに気づかされました。それならば（人間以外の）生き物の側に視点を移すと、さらに多様な見方・見え方があるに違いありません。このプロジェクトはこの多様な視点や感覚をいかにすれば他者と共有できるかという挑戦の一部です。
「虫の生活」では私たちにも身近な生物である昆虫にフォーカスしていますが、この選択は私が昆虫学者であることと無関係ではありません。また、今回皆様にお見せする展示やワークショップは糞に関するものになっていますが、その前段階には必ず飼育というプロセスがあり、プロジェクトにとってはそれも重要なステップでした。

［木村］
冨田氏との生き物をめぐる交流の中で、カイコの糞の彫刻的な形状に興味を持ったところからこの「虫の生活」が始まりました。調べているうちに、カイコの糞が漢方として飲まれているということを知り、他の昆虫の糞はどのような味なのだろうと考え、様々な糞を集めて飲んでみることにしました。
実際に糞を飲みくらべてみると、刺激的な味があるものや、香り高いものなど、食草と密接な関係があり、逆に、食草が同じでも昆虫が違えば風味が異なることを体感しました。
味を体験することと並行して、糞の色素にも興味を持ちました。糞をお湯で抽出した色素を見てみると、違う昆虫でも食草が同じだと近い色になりますが、紙への展開の仕方が異なります。紙の性質と、糞の性質を利用しながら、ドローイングを制作しました。
以前から私は、全く違う世界に住む彼ら(生き物)のことを理解することができないという、寂しさを感じていました。その「あらがい」として自身の感覚をフル活用して、昆虫の視点を得ようとすることが、このプロジェクト「虫の生活」です。

○ K-T_01

糞の展示

Collection of feces
＊ビンを手にとって、フタを開けて匂いを嗅いでいただけます。

18種類の糞を展示。カイコ、ナナフシ、エリサン、クワコは冨田の研究対象であり、それ以外の昆虫は冨田が捕まえたり、うわさを聞いた研究所のひとたちが冨田にあずけたもの。木村が近所で捕まえた昆虫も少数。

○ K-T_02

道具と記録映像

Video recording and tools
＊撮影不可。

冨田と木村が、糞をお湯に抽出しテイスティングする時間を記録した映像。試飲した昆虫は全部で８種類。
実施日：2024年8月

○ K-T_03

ドローイング

Drawings

糞の色素をお湯で抽出してドローイングを作成。
素材：昆虫の糞（カイコ、エリサン、ナナフシ、ナミアゲハ、オオスカシバなど）、クロマトグラフィーペーパー、木酢酸鉄、硫酸第二鉄、塩化銅。

○ K-T_04

管のガラス

Two tubes
＊作品にお手を触れないでください。

人間と昆虫の消化管のモデルをガラスで制作。

○ K-T_05

ワークショップ

Workshop

展示期間中に、冨田と木村が、虫の糞をお湯で抽出して味わうワークショップをおこなう。
実施日：2024年8月25日

STAGNATE

滞留

美術作家 ARTISTS

木村亜津・前川紘士

生物学者 BIOLOGIST

冨田秀一郎

2024.8.24(Sat) —— 9.15(Sun)

Title:Stagnate
Date: 2024.08.24(Sat)-09.15(Sun)
Open: 13:00-19:00
Closed: Wednesday and Thursday
Venue: Gallery PARC
Adress: Saikachicho, Kyoto Shi Kamigyo Ku, Kyoto Fu, 602-8242
Exhibitor: Azu Kimura(Artist), Shuichiro Tomita(Biologist), Koji Maekawa(Artist)

About

“STAGNATE” is an independent exhibition by artists Azu Kimura, Koji Maekawa, and biologist Shuichiro Tomita. The project is an ongoing culmination of works during their participation in the Fundamentalz program, which has promoted exchanges between scientists and artists since 2021.

Artists Kimura and Maekawa have collaborated with Biologist Tomita on their individual investigations. Through these discussions, they have made different approaches and discoveries, gradually accumulating fragments that can be shared with others.

The exhibition, titled “STAGNATE,” encompasses the ideas and thoughts of the participants.

It will showcase the detritus of research and thoughts accumulated throughout the meetings between artists and biologists.

Whilst these fragmentary moments flow past us unnoticed, In our exhibition, we hope for these works to ignite unexpected interactions and responses from visitors, generating a growing synergy of ideas, works and encounters.

Event

Event1: Stagnation Talk 1
Date and time: 2024.08.24(Sat) 15:00-16:00
Kimura, Maekawa, and Tomita will discuss their projects and work on display in the gallery space.

Event2: Stagnation Talk 2
Date and time: 2024.09.15(Sun) 15:00-16:00
The three exhibitors reflect on the exhibition and their processes of exchange.

Event3: Life of Insects
Date and time: 2024.08.25(Sun.) 15:00-16:00
Kimura and Tomita will hold a workshop where you can taste tea made from insect droppings.

Azu Kimura (Artist)

Born 1986 in Tokyo, Japan. Azu Kimura is a Visual Artist that focuses on drawings, sculptures, and installations.
After graduating from Musashino Art University, she worked as an employee at an Ikebana company. During this time, she became interested in plants and living things and began working as an artist.
Her interests are diverse, incorporating plants, geological strata, and insects. As a result, her work is informed by experiences she cultivates during fieldwork.

Statement:
If the elements of our world were represented as individual spheres, how do these circles interconnect when I encounter a new subject? Even if the circles seem unrelated, I wonder where I can build points of connection. I have been seeking the point of contact by observing and contrasting subjects from both a bird's eye and microscopic viewpoint, and at the same time, giving these discoveries shape through art.
This collaboration with Biologist, Dr. Tomita brought upon a new challenge. My subject was insects, but also the understanding and bridging of our differing perspectives to inform my new works. This time, my subjects are insects. Working with biologists, I tried to find a practical and tangible means to respond to our differing perspectives.

Shuichiro Tomita (Biologist)

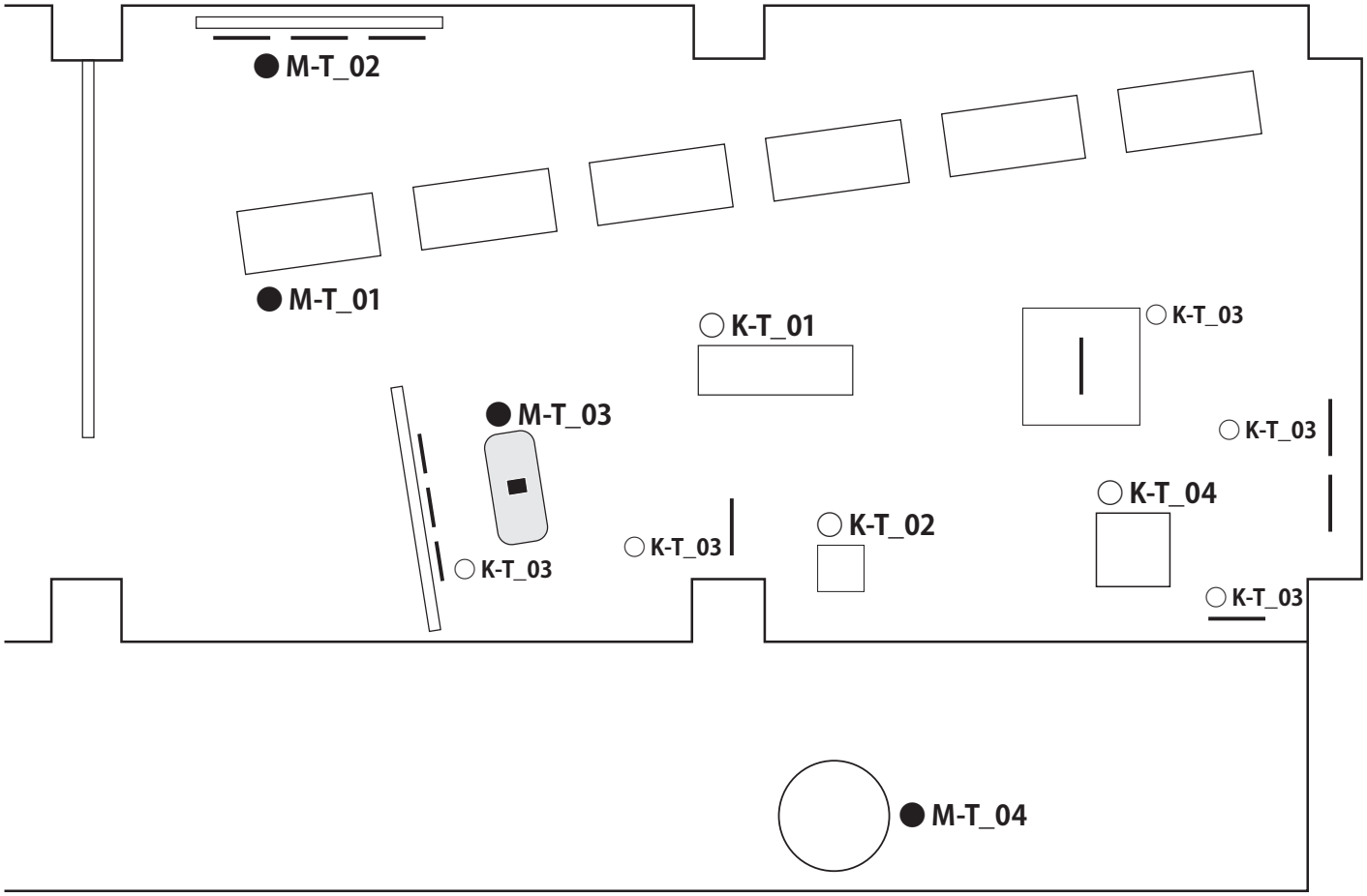
Born in 1965 in the city of Kitakyushu, the chimney city. I developed a taste for unselective sensory circuits during my five-year-long dorm life as a teenager. After giving my factory-worker father a hard time by declaring “I want to become a farmer”, I went on to study at the Faculty of Agriculture at university. There I chose to join the silkworm research lab attracted by the gentle atmosphere of the professors. Since then, I have been exploring silkworms as a primary research material.

Statement:
When we face various biological phenomena, we tend to anthropomorphise at every level to understand them. This led me to a fundamental question: “Can we communicate with other living beings (and if so, how)?” However, through interactions with artists, I realised that even among humans, such means and methods are not always guaranteed. So, I decided to embrace the fantasy of “shared sensation” without discrimination among all living beings.

Koji Maekawa (Artist)

Born 1980 in Osaka, Japan. I explore the possibilities of art and expression while determining the interests and circumstances of each situation. In recent years, I have continued my activities while straddling between individual practices, such as exchanges with scientists, the production and use of haptic works, and search for ways in which art can overlap with daily life. Main exhibitions and projects include, “Koji Maekawa Solo Exhibition: Drawings of Manifolds - Kavli IPMU Artist in Residence report exhibition” Osaka University, Osaka(2023), “UNIVERSAL MUSEUM :Exploring the New Field of Tactile Sensation” National Museum of Ethnology, Osaka (2021) etc.

Statement:
During our exchange with Dr. Tomita who is a biologist, our mutual regard for “elusiveness” was both a starting point and a motivation for engaging in exchange. Through various ways, we continue to search for points that spark interest in both of us.
This time, we will create an opportunity to display and share the non-verbal exchange of models inspired by our interactions. And also throughout three years I have been gradually recording the living things we find around us. I want to take this opportunity to organise these collected records, as a means to apply these experiences in future practices.



● **M-T_01**(Koji Maekawa, Shuichiro Tomita)
Reproduction of "Exchanges of models"
2021-2024

● **M-T_02**(Koji Maekawa)
Touchable line drawings_Volume 4 / Touching for Caylus
2021-2024
platanus, ork, willow, capsule paper, paper board

● **M-T_03**(Koji Maekawa, Shuichiro Tomita)
Diary of organisms
July 2021 - June 2024
2021-2024 ※Miscellaneous notes

● **M-T_04**(Koji Maekawa)
Insect attracting lamp and a Structure for stagnation
2024
net, light stand, insect attracting lamp, battery

○ **K-T_01**(Azu Kimura, Shuichiro Tomita)
Collection of feces

○ **K-T_02**(Azu Kimura, Shuichiro Tomita)
Video recording and tools

○ **K-T_03**(Azu Kimura, Shuichiro Tomita)
Drawings

○ **K-T_04**(Azu Kimura, Shuichiro Tomita)
Two tubes

○ **K-T_05**(Azu Kimura, Shuichiro Tomita)
Workshop